

お伴します 文章見本

基地の食堂は、配属決定前の研修期間を終える任官候補生で賑わっていた。汗と悔し涙と緊張の数週間の後、残すは午後の最終確認と手続きのみ。食堂には開放感からくる陽気さとのんびりムードが漂っていた。

シチロージもそんな中のひとりだった。

研修の成績は、大いに満足とはいかなくともまずまずのほずで、いくつかある希望の配属先のどれかにはひっつかかるはずだ。できうれば、第一希望の前線の……

「食事時にすまないが」

ざわめきを衝いて、朗とした声が食堂に響き渡った。

「しばし手を貸して欲しい」

食堂はたちまち静まりかえった。

見れば入口に「大人」がひとり立っている。

軍服を着ているが教官の内のひとりではない。

暗褐色の長い髪に階級章のない深緑の軍服

——シチロージには見当が付いた。研修中の

資料映像でちらっとシルエットが見えただけ

だが、多分あの方だ。

周囲でも賢い者達さは気付いたようで、向かいに座る仲間もシチロージに目をむいて見せた。

（最前線のさらに最前線で戦闘部隊を率いるお方が、なぜまたこんな所へ？）

その人物は、一斉に自分に向けられた視線をひと渡り見回すとおもむろに片手を顎髭にあてがい、刹那つぐんだ口を再び開いた。

「この中で一番足の速い者は？」

一同から返事が沸き起こる寸前に、先ほど目をむいてよこした仲間が素早く立ち上がった。「それならば、こいつです！」

彼はシチロージを指差した。

「おい、ちよつと待てよ！ 足ならお前の方が」

シチロージも思わず立ち上がった。

彼はシチロージの方に少しかがんで声もいくらか落としたが、それでも皆に聞こえるような音量で続けた。

「どうやら、午前のカリキュラムのどこかで足首をひねったらしいんだ。ゆっくり歩く分には良いんだが」

それに対する異論は誰からも出なかった。

(あきれた。俺に押しつける気だな)

韋駄天を所望してあそこに立つお方は、一部で懂れる物好き——俺みたいない——もいるが

前線の鬼と恐れる者も多いらしい。研修中の聞きかじりだ。手伝えと言われて何をさせられるのか、皆が尻込みするのも分からなくはない。

今間近に見て、確かにその風貌——尖り気味の鼻と眉間に寄せられた皺——には抗いがたい威圧感がみなぎって……ん？ これは、威圧というより少々焦れておられるのか？

「二番手でも構わぬが」

研修生のやり取りに割って入った声は静かだったが、これ以上の議論は必要ないという響きがあった。

ここでうだうだやっつけていても埒があかない。第一、もう答えは決まっているんだから。

「自分でお役に立つことでしたら」

覚悟を決めたシチロージは、テーブルを回って進み出た。

何ができるか分からないが、腕試しになるか

も知れない。

途中、ちらと仲間に見線を送る。

(俺のトレイも下げとくんぞ)

かすかに返ってきた笑みは(有り難く下げさせていただきます)と感謝を述べていた。